

保健所における未熟児の early intervention の試み

分担研究ハイリスク児の発達支援(早期介入)システムに関する研究

分担研究者 前川喜平¹⁾

研究協力者 竹内恵子²⁾, 小西行郎²⁾

要約：福井保健所において低出生体重児の early intervention を行った。生後半年以内の児について、保健所からの通知によって管内の対象児を集めた。指導スタッフは福井乳児発達研究会から小児神経科医、心理学者、言語および作業療法士、助産婦、院生などであり、それに保健婦が加わり行った。2カ月に一度、木曜日の午後講演、集団および個別相談、さらには親を中心とした懇談会などを行なった。参加者は20名前後であり、質問も多く、続けて参加される親が半数以上を占めた。質問は健康や栄養に対するものが多く、育児不安を持つ親が多いことが分かった。

見出し語：early intervention (EI)、保健所、育児不安、低出生体重児

はじめに：周産期医療の進歩にはめざましいものがあり、新生児死亡率は著しく低下し、その課題は intact survival へと移ってきた。一方ハイリスク児の神経学的予後のついでに系統だった調査が行われるようになり、従来、正常あるいは境界児と思われていた児に学習障害などが少なくないことが指摘されるようになってきた。また家庭環境や両親の養育態度などがこうした児の発達に影響を与えることも強調されるようになり、いわゆる early intervention (以下EIと略す)がわが国でも行われるようになってきた⁽¹⁾⁽²⁾。しかし、このような試みは設備の整ったNICUなどを中心に行われることが多く、保健所において一つの地域を対象にしたものはなかった。われわれは福井保健所において低出生体重児のEIを試み、地域におけるEIのあり方を検討した。

研究対象および方法：平成8年3月から12月までに福井保健所管内で出生した生下時体重 2500g 以下の児を対象として、2カ月に一度保健所内で

育児教室を行った。児の呼び出しは保健所の広報と電話によっておこなった。初めての参加者はマシュマロの会、2回目からは step by step に参加してもらった。教室における指導スタッフとしては福井乳児発達研究会から小児神経科医、福井大学教育学部の教員と院生、言語療法士、作業療法士、および助産婦などが参加し、保健所の保健婦と共同して指導に当たった。会をはじめに医師や心理学者が医学および発達学からの簡単な講義をし、以後集団による質疑応答、育児相談を行い、その後は保健婦と親達による懇談会などを行った。作業療法士や心理学教室の院生などによる遊びの指導あるいは発達テストなども行った。

結果：5回の教室に参加された児の数と両親の数、および指導にあたったスタッフの数は表1に示すとおりである。季節の関係もあり、単純には言えないが、一回参加された方の半数以上は step by step にも参加されることが多く、中には毎回参加される方もおられる。参加した児の属性は図1-4に示したとおりである。家族構成は核家族が57%を占め、母親の職業としては主婦が73%となっているが、福井は全国一共

働きの多く、祖父母との同居が多いといわれており、このデータは合わない。教室が平日の午後に行われたことと関係していると思われる。また出生場所が個人の産婦人科が過半数を占めているのも奇異に思えるがリスクのすくない低出生体重児が開業産婦人科医によってケアされていることは事実である。図にはしなかったが出生時の体重は $2,206.7 \pm 309.9$ g で在胎週数は 36.5 ± 2.7 週であった。したがってほとんどの症例は2,000g以上で34週以上のいわゆる low-risk ベビーであった。生後3カ月以降のベビーを対象としたため、親の関心は健康、栄養などが多く、具体的には「体重増加」「黄疸」「ミルクの飲み」「便秘」などの質問が多く聞かれた。

考察：アメリカで始まったEIが松石ら⁽¹⁾によってわが国でも導入されるようになり、さまざまなNICUを中心に行われるようになってきた⁽²⁾⁽³⁾。また最近の周産期医療の進歩によって各地に施設の整ったNICUが整備され、新生児搬送システムなども確立されてきた。しかし、そうした設備のない地方が存在することもまた事実である。わが福井県では厚生省の基準を満たすようなNICUはなく、低出生体重児が個人の産婦人科で管理されていることも珍しくない。したがってEIが本格的に行われるようなことはなかった。一方地域保健法の改正によって乳幼児検診などが市町村に移譲されるようになり、保健所の母子関係の業務としては障害児と未熟児が重要な課題となってきた。そこで保健所の業務としてEIを行うことができるのではないかとということになり、この教室が始まった。保健所からの通知によって参加した児や親の数はおおよそ1回あたり20名前後であり、スタッフの数から考えても比較的十分な指導が行える数といえると思われる。しかし、平日の午後ということから仕事をしている母親の参加が得られなかったことは次年度に向けての課題と言える。

EIはその対象を2-3才以後としていることが多く、我々のように1才以内から行った例は少ない。1才以内では障害をもつ児が入っていることがあり、途中で障害が見つかったときにその親にどのように対処するのかが問題となるこ

とがある。現実に我々の場合にも脳性麻痺の症例と一緒に教室に通っている。しかし、我々はそうしたケースも一緒にして指導することでむしろ障害児にたいする理解を広げていけるのではないかと考えている。また、1才以内のほうが育児不安を持つ親が多いことも事実であり、この時期に育児不安を早く解消することが大切とも言える。今後児の発達状況や親の気持ちの変化や要求、さらには遊びなどを利用した教室運営などを検討してゆきたいと考えている。

今回福井乳児発達研究会という団体と保健所が協力してE Iを実施した。しかし、こうしたことはきわめて稀なことである。保健所が実際E Iを主体的に行おうとするとき必ず専門医、心理関係のスタッフ、言語および作業療法士、助産婦、そして保健婦らの資源をどのようにして確保するのが問題となる。今年度はE Iを実施する前の段階についての検討であった。したがってE Iの具体的な方法やその効果などについては今後の検討が必要である。

参考文献

- 1) 松石豊次郎、石橋紳作、山下裕史朗他、：極低出生体重児の early intervention. 脳と発達 26 : 149-155, 1996
- 2) 神谷育司、鈴木雅子、斎藤さつき、他：極低出生体重児に対する early intervention について 一聖隷浜松病院 新生児未熟児センターでの試み 小児の精神と神経 36 : 295-395, 1996
- 3) 川上義：極小未熟児に対する early intervention. 小児科診療 58 : 3-8, 1995

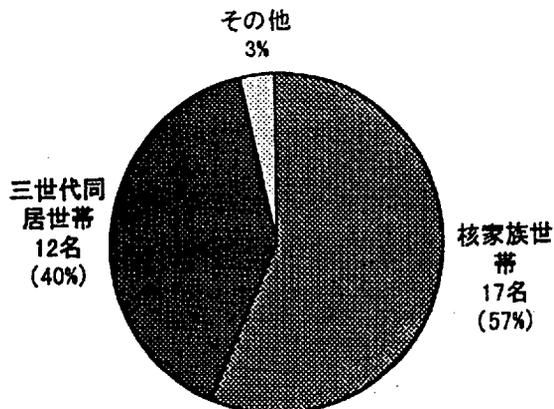


図1 家族構成

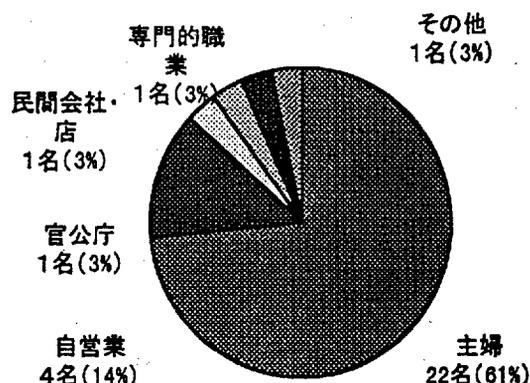


図2 母親の職業

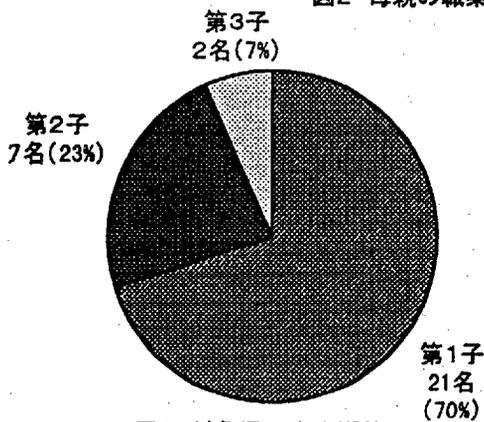


図3 対象児の出生順位

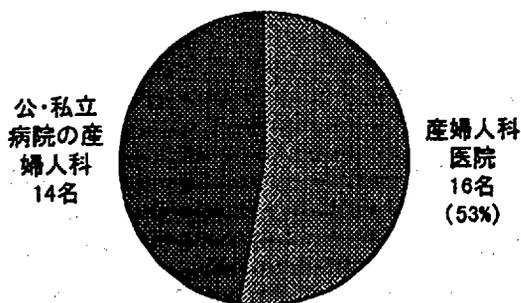


図4 出生場所

月日		5/16	7/18	9/19	11/21	1/16
マッシュマロの会						
参加人数	対象児	14	6	5	8	7
	母親	15	6	6	9	9
スタッフ数	小児科医	4	1	2	2	2
	心理関係	1				
	保健婦	3	2	2	2	1
	助産婦	1		1	1	1
step by step						
参加人数	対象児		9	11	16	13
	母親		8	10	13	13
スタッフ数	小児科医		1	1	1	1
	心理関係		1	2	2	1
	言語療法士				1	1
	保健婦		2	1		2



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:福井保健所において低出生体重児の early intervention を行った。生後半年以内の児について、保健所からの通知によって管内の対象児を集めた。指導スタッフは福井乳児発達研究会から小児精神科医、心理学者、言語および作業療法士、助産婦、院生などであり、それに保健婦が加わり行った。2 カ月に一度、木曜日の午後講演、集団および個別相談、さらには親を中心とした懇談会などを行なった。参加者は 20 名前後であり、質問も多く、続けて参加される親が半数以上を占めた。質問は健康や栄養に対するものが多く、育児不安を持つ親が多いことが分かった。